

官邸崩壊

高嶋哲夫

最終回

第八章 反撃

1

ノックと共にドアが開き、秘書が入ってきた。

その悲壮な顔を見て、ドナルド大統領は反射的に執務机から立ち上がった。

1

「イスラミック・ステイトが犯行声明を出しました」

大統領の身体から力が抜けていく。スーザンの悲報かと思ったのだ。

秘書が用紙を出して読み始めた。

「我々、I Sの勇敢なる兵士たちは日本の首相官邸を占拠している。アメリカの国務長官と日本の首相をとらえ、アメリカと日本の特殊部隊を全滅させた。世界のI Sの兵士たちよ、アッラーの名のもとに彼らに呼応して立ち上がろう。勇敢なるI Sの兵士にアッラーのご加護を」

「I Sが関与している信憑性は？」

「CIAの分析官はゼロに近いと言っています。彼らは環境問題や難民救済などに興味はありません。金以外の要求は、彼らからは考えられません。あっても人質交換です」

「アルカイダや、その他の国際テロリスト集団だとも思えません。宗教色や際立った政治色はなく、武器も最新鋭の欧米製です」

首席補佐官が補足する。

大統領もそう思った。ISや他のテロリスト集団は、要求内容については知らないようだ。そして、娘が囚われていることも。知っていれば別の声明を出すだろう。

「日本の官邸を占拠しているのは、金が目的の単なる犯罪集団か」

「FBIやCIA、NCTCも、そう考えているようです」

NCTCは同時多発テロ事件の後に創設された、国家テロ対策センターだ。

「日本で私の娘を人質としているのは、アメリカ国内の犯罪集団だと言うのか」

大統領は吐き捨てるように言った。

たかが五十名足らずの犯罪集団に、アメリカと日本という二つの世界の指導的國家が翻弄ほんろうされているのだ。

「大統領、日本の首相官邸からです」

首席補佐官が大統領に受話器を差し出した。部屋中に緊張が走った。

受話器を受け取ったが、沈黙が続いている。

「誰なんだ、おまえは」

問いかけたが返事がない。静かな息遣いだけが聞こえてくる。だがそれは知らないものではない。むしろ聞きなれたものだ。長年、共有したことのある空気。官邸からというところ——。大統領の脳裏に一人の男の姿が浮かんだ。

「ドミニク・アンダーソン 国務長官かね」

「そうです、大統領」

「ドミニク、無事なのか」

〈私を心配してくれているのですか〉

意外そうな声が返ってくる。

「もちろんだ。我々は幼馴染であり、親友じゃないか」

〈そう言ってくれることを感謝していいのか、それとも単なる——〉

「友人として無事を願っていた」

〈私は国を裏切ったことになるのか。同時に大統領も〉

数秒の沈黙の後、かすれた絞り出すような声が返ってきた。自分自身に問いかけるような口調だ。

「何を言っている、ドミニク」

〈申し訳ないことをしました。私がテロリストにスーザンの情報を流しました。大統領には、本人も知らない娘がいると〉

「嘘だろう。嘘だと言ってくれ、ドミニク」

〈本当です、大統領。こうして私が日本の総理官邸から電話をしていることが裏切りの証拠なのです。私がテロリストに協力している

からこそ、自由に振る舞えるのです」

待ってくれ、と大統領は送話口を手で押さえた。

「この電話は録音されているかね」

首席補佐官に聞いた。

「もちろんです」

「ただちに録音を中止して、今までの会話を消去するように」

大統領は部屋の中にいる全員に出て行くように指示した。首席補佐官は一瞬、怪訝そうな顔をしたが、何も言うことなく秘書と共に出て行った。

「なぜ、君はスーザンのことを」

「もう何年も前の話です。私の顧問弁護士の事務所で、ナンシー・ハザウェイという助手が働いていました。優秀な女性です。ナンシーとは仕事で何度か会って、仕事以外のことも話すようになりました。ナンシーは実に賢明な女性でした。彼女はシカゴ生まれ、シカゴで育っている。彼女には娘がいて、娘のハーバード大学入学と同時にボストンに出て二人で暮らしています。現在、娘はワシントン・ポストの政治記者だと聞かされました」

大統領は無言で聞いている。アンダーソンは続けた。

「中学時代、あなたは私に銀の十字架のネックレスを見せてくれたことがあります。祖母からもらったものだと言っていました。中世ヨーロッパのもので非常に珍しく、また高価なものだとも。だから大切にしていると」

「そんなことがあったか。しかしあれは、なくしてしまった。ずいぶん昔の話だ」

「私には非常に印象的なものでした。今もあのときの、あなたの得意そうな顔を覚えています」

「それがどうかしたのか」

「同じものをナンシーが持っていました。大昔にある人から、もらったものだと言って」

大統領の脳裏にある場面が蘇よみがえった。確かに、ある女性に手渡した。彼女が無邪気に欲しがったからだ。あのとき、自分は目の前の女性を愛していると信じた。しかし彼女にはそれ以来、会ってはいない。

「そしてあるとき、娘のスーザンの写真を見せてもらった。私は驚きました。あなたの若い時にそっくりだった。男と女の違いはありませんでしたが、瓜二つでした。そしてあなたの母親にも」

ナンシーからもらった写真を取り出した。顔の輪郭りんかく、口元、確かに似ている。意志が強く、挑戦的な目も、自分自身に見つめられているようだ。

「私はさらに詳しく、シカゴでの生活について聞きました。話が娘の父親のことになると、ナンシーの口は重く、閉ざされてしまった。しかし、私の直観と言うべきものは、ますます確信を持っていきました。ナンシーの娘、スーザン・ハザウェイは、大統領、あなたの娘だ。しかも、スーザンができたとき、あなたは四十二歳、彼女は

まだ十七歳だった」

「なにが言いたい」

思わず声が大きくなった。

「きみは私の政策に批判的だった。あからさまには言わなかったが、私にはよく分かっていた。それと関係があるのか」

「落ち着いてください、大統領。私はあなたを非難しているのではない。ナンシーもあなたを恨んではない。むしろ、あなたに感謝している。自分の人生を変えてくれた人としてね。そして、スーザンを与えてくれた人として。私はそう感じました。このことは、私は誰にも話さなかった。墓場まで持っていくつもりでした。あることが起こるまでは――」

大統領は言葉を失っていた。逆にアンダーソンの声は次第に落ちていき、着きを取り戻している。

「ホワイトハウスは、大統領を頂点にいただくチームです。最も重要なのはトップの見識と指導力です。下の者は大統領を信じ、助け、従うのみです。だが、あなたには人の意見を聞く必要があった」

アンダーソン 国務長官の言葉は、大統領の胸を強く打つものがあった。

「私は取り返しのつかない過ちあやまちを犯してしまいました。この償いつぐなは自らがしなければならぬ」

「なにをする気だ」

「ここで起こったトラブルの後始末です。多くの命が失われた。こ

れ以上の命が失われることは避けなければなりません」

電話は唐突に切れた。

大統領は混乱していた。アンダーソンがテロリストの仲間だと。

彼らに情報を流していたというのか。幼い頃から友人と信じていた男が、私を裏切っていたとは――。

大統領は首席補佐官を呼んでアンダーソンの話をした。

「大統領、顔色がすごく悪い。医者を呼びましょうか。ホワイトハウス内に待機させています」

「私は大丈夫だ。アンダーソンのオフィスを調べろ。公表する前に全てを私に報告するんだ」

「自宅はどうします」

「ただちにFBIを送れ。いや、家族はどうしてる」

大統領の頭にアンダーソンの妻アンと二人の子供の顔が浮かんだ。二人の子供は男と女で既に成人している。来週はアンの誕生日だ。秘書にプレゼントを用意するよう頼んでいる。アンダーソンは早まったことをしてくれた。同時に彼の最後の言葉が浮かんだ。後始末をする、何をしようとしている。

「サンフランシスコの別荘に行っています。国務長官がそう配慮していたのでしょうか」

「自宅の捜査をしてくれ。私の――いや国家に不利益になりそうなものは全て押収しろ。しかしなぜ、彼は私を裏切るようなことをし

た。我々は幼馴染であり、親友だった」

「大統領に親友はあり得ません。我々は助言し、あなたが決断し、指示する。我々はその指示に我々は従うだけです。決断には一片の私情もないはずです。そのため的大統領です」

首席補佐官が、アンダーソン國務長官と同じことを言っている。

孤独に耐えるのが大統領――、という言葉を思い出した。アンダーソンが言っていた言葉だ。

2

FBIとCIAの長官が対テロ補佐官と共に入ってきた。

現在、二つの組織が合同でアメリカ国内に潜むテロリストの捜査を行っている。組織の創設以来、まれなことだ。

「日本から送られてきた情報を調べました。三人のテロリストが持っていたスマホの情報解析です。三人の男に共通する企業が浮かびました。マッシュという軍事企業です」

くそっ、という呻きにも似た声が大統領の口から洩れた。

傭兵の育成訓練企業、ボディガードの育成と派遣を行っている国際に知られた新興軍事企業だ。アメリカ政府との取り引きも少ない。先月、この企業について議会で質問が出たと報告を受けている。あの時の質問は何だったか。政府スタッフの答弁書を読んだだけだった。相手議員も深く追及はしなかったと聞いた。どうせガ

ス抜きの問題だ。業界のロビイストとの取り引きができていたのだろう。

「確かな情報なのか」

「間違いはないかと。現在、更に詳細を調べています」

「我が国の新興軍事企業だ。ここ十年で著しく業績を伸ばしている。傭兵の育成企業だったな」

大統領は対テロ補佐官が出した「マッシュユ」の資料を受け取った。何度か見たことのある資料だ。一時期、米軍の新兵訓練を全面的に依頼しようと本気で考えたこともあるが、アンダーソン国務長官が強く反対した。彼は、この企業について詳しいようだった。

「そうです。ノースカロライナ州に広大な訓練施設を所有しています。外国の軍指導者の委託訓練も行っています。我が国も紛争国の要人警護や警察組織の訓練で関係があります」

「今回の官邸占拠事件はマッシュユが関わっていると言うのか」

「企業全体というより、トップを含めた何人かです」

「至急速捕して、組織の壊滅をはかれ」

「現在、FBIとCIA、NCTCが中心となって、地元警察と作戦を練っています。一時間以内に行動準備ができます。その後は大統領の許可が出次第、作戦が開始されます」

「実際に行動するのは地元警察で大丈夫か。相手は軍隊なみの装備を持ち、訓練を受けた兵士たちだ」

「FBIのテロ対策部隊が中心になります。さらに、州兵を護衛に

つけます」

「軍の特殊部隊が攻撃するのではないのか。ビン・ラディン暗殺のときのように」

大統領はかすかなため息をついた。あれは大成功だった。アメリカ特殊部隊の存在と力を世界に見せ付けた。どこに隠れているかが、アメリカの敵は必ず見つけ出して殺害する。

「あれは海外での対テロ作戦です。今回は国内での作戦で、対象も身代金目的の犯罪組織です。逮捕するのは、アメリカ人犯罪者です。国内法が適用されます。後で面倒なことにならないためです」

「下手をしたら大規模な銃撃戦になる。甘く見ると全滅するぞ。日本の首相官邸のように」

日本の官邸では、ネイビーシールズがマッシュユの奴らに全滅させられている。言葉に出そうと思っただが飲み込んだ。誰も口にしたくない話題だ。

「十分に承知しています。相手は自動小銃はもちろん、手榴弾、rocket弾、迫撃砲、ミサイルさえ持っています。戦車やヘリも出してくるかもしれません」

「戦争を始めようというのか」

「そうです。敵は最新兵器で武装された軍隊と同じです。兵士も訓練されている。小国の軍隊より遥かに強力です」

「そんな危険な企業をなぜここまで、放っておいた」

「歴代大統領の希望です。中東に駐留させている部隊には多数の備

兵もいます。アメリカの若者を死なせないためです。彼らを使った作戦で、大統領、あなた自らが許可したものもあります」

大統領は黙り込んだ。確かにサインをした記憶がある。

ノックと共にFBI長官と国家保安部の職員が入ってきた。

「マッシュユのCEOアーノルド・マッシュユ逮捕の準備が整いました。作戦開始の許可をお願いします」

「相手は気付いているのか」

「まだかと思われませぬ。しかし、大規模な作戦です。気付くのは時間の問題です」

「逃亡の危険があるということか」

「だから、急いでいます」

「作戦開始は私の命令があつてからだ。日本の官邸に拘束されている人質の安全が確保されるのを待つ」

二人は一瞬怪訝そうな顔をした。不満があるか、という顔で大統領が見返す。

大統領の脳裏には十分ほど前の電話のやり取りが残っている。

「金の用意はできたか。ホワイトハウスにとっては、三億ドルなどどうにでもなるだろう。まさか、自分で払う気じゃないだろう。我々にとつては、どちらでもいいが」

「スーザンは解放されたのか」

「もうすぐだ。お前のもとに帰してやる」

「もう一度、娘の声を聞かせてくれ。顔を見せると約束を——」

電話は一方的に切られた。

「必ずあいつらを殲滅^{せんめつ}してくれ。生死を問わずだ」

「全力を尽くします」

大統領の言葉に答えて二人は出て行った。

「スーザンの安全が確認され次第、攻撃命令を出す」

大統領は首席補佐官に指示した。

梶元副総理はテレビを見ていた。事件が公^{おおやけ}になってから、国内のすべてのチャンネルが官邸占拠、人質事件関連を放送している。

十分前までは官邸を映していたテレビは、現在は官邸の三キロ圏内から避難する住人たちを追っていた。

梶元の避難の呼びかけ直後から、車や徒歩で脱出が始まったのだ。

制服警官と機動隊が出て、避難する人たちの誘導を行っている。

幹線道路には大型バスが止められ、続々と人々が乗り込み、満員になれば出発していく。歩いて三キロ圏外に向かう人々の群れも続いていた。

梶元はどこかで見た風景だと思った。あれは——東北を襲った巨大地震と津波があったときだ。都内では三百五十万人を超す帰宅困難者の群れが、自宅を指して歩いていた。

〈都心からの脱出は続いています。依然、官邸はテロリストに占拠され、五十人以上が人質として捕えられています。テロリストによ

って都内に仕掛けられた爆弾の発見には至っていません。警視庁、自衛隊、消防が全力をあげて、爆弾を探しています。住民の方々も不審な物を見かけたら手を触れることなく、警察に知らせてくださ
い

テレビではヘルメットをかぶったメークの濃い女性レポーターが呼びかけていた。どこか現実感がないが、やはり現在進行形の出来事なのだ。

首相官邸が占拠されて、すでに三十時間近くがすぎている。

この間、梶元は一睡もしていない。ここにいる全員がそうだ。官邸内にいる人質たちも疲れ切っているに違いない。そして、ただ一人で戦っている女性警護官も。

「避難区域は本当に三キロでいいのですか。徒歩一時間弱の距離です。爆弾が仕掛けられた範囲はさほど広域ではなく、爆発の規模はさほど大きくないということですか」

「それは副総理が決めたことで——」

漏れ聞こえてくる声に、梶元は耳を塞ぎたい衝動に駆られた。

確かに自分が決めたが、根拠などありはしない。そもそも、想定外のことが起こっているのだ。準備はしていない。地震と津波のときもそうだった。だが生かせたかどうかは別にして、自然災害には過去の経験はあった。今度はそれすらもない。

「このまま避難を続けてください。爆弾の搜索は進んでいますか」「警視庁が総力を挙げて爆弾の搜索をやっていますが、未だ発見に

は——」

梶元は官邸を映しているモニターに目を向けた。

あの中には五十人を超える人質が閉じ込められている。その中に、新崎総理とアンダーソン国務長官がいる。そしてドナルド大統領の娘スーザンが。大統領の隠し子か。しかし、あの男はそれをやっきになって隠したり、言い訳するほどデリケートな精神の持ち主でもないだろう。ではなぜ、シールズに無謀な奪還命令を出してまで、人質救出を急いだのか。梶元の脳裏を様々な思いが駆け巡った。

「警視庁のS A Tと自衛隊の特殊部隊の準備はできていますか」

梶元は対策本部にいる誰にもなく聞いた。

「初めての合同作戦ですが、打ち合わせはできています。いつでも行動できます」

「現場指揮官、横田警視の指揮下に入って、指示に従ってください。彼がいちばん現場を熟知し把握しています」

今まで上が口を出しすぎた。現場の意思に任せるべきだった。そうすれば、これほどまでの犠牲者を出さずに済んだのかもしれない。苦い思いが梶元の胸を押しつぶすように迫ってくる。

「今後は現場の指揮官にすべてをゆだねます。最良と思われる方法を取ってください。我々は全力でそれをサポートします。すべての責任は私が取ります」

梶元は部屋中の者に向かって言った。部屋中の空気に緊張感が漂った。

官邸との直通電話が鳴り始めた。室内にさらなる緊張が走った。梶元が受話器を取ると、相手はゆっくりした英語で話し始めた。
〈今から十分以内に、五十億円ずつ、四つの口座に振り込め。確認できなければ、半数の人質が死ぬことになる〉

「待つてくれ、通訳に確認したい」
梶元の言葉を無視して、四つの国の四つの銀行口座を言うど電話は切れた。

「聞いていた通りです。直ちに振り込んでください。人質の命がかかっていきます。急いでください」

梶元の言葉に、秘書が一礼して出ていく。

3

明日香のポケットでスマホが震えている。高見沢だ。

〈どこにいる。脱出に成功したのか〉

「まだ官邸内です。スーザンも一緒です。何か起こりましたか」
「いま、二階のエレベーターの近くだ。テロリストたちの動きがおかしい。脱出準備が始まっている」

普通の声を出そうとしているが、小さく聞こえにくい。かなり無理をしている。痛みに顔をしかめながら話している高見沢の姿が浮かんだ。

「動かないでください。そっちに行きます」

「来るな。おまえは俺にかまわず、人質を救い出して脱出しろ」

分かりました、明日香はそう答えるのが精一杯だった。高見沢の電話は切れた。

「高見沢さんなんですよ。彼、大丈夫なの」

「彼も二階にいる。エレベーターの近く」

死ぬ気なのかもしれない、明日香は声に出さず言った。

部屋の外が騒がしくなった。ドアの隙間から外を見ると、テロリストたちが慌ただしく行きかっている。高見沢の言葉通り、何かが起こっている。

「テロリストのやつら、脱出の用意をしている。爆弾をセットし終わった」

出て行くこうとする明日香の腕をスーザンがつかんだ。

「今はダメ。殺されに行くようなもの」

「行くのよ。爆破を阻止するの。私のあとに続いて」

明日香は短機関銃を構えて部屋を出た。思っていた以上にテロリストの動きが激しい。

「あいつら、こっちにやってくる」

「向こうにもテロリストがいる。十人以上。どうすればいいの」

スーザンが明日香の腕をつかむ手に力を入れた。

「こっちだ」

横から誰かが、明日香のもう一方の腕をつかんだ。アンダーソン

国務長官だ。

「何をしてるんです。こんなところで」

スーザンの言葉に答えず、国務長官は辺りに目を配りながら歩き始める。

明日香とスーザンは言われるままについて行った。

「ライアンは脱出の準備をしている。官邸が爆破されるまで時間がない」

国務長官の顔は青白く、額には汗が滲んでいる。精神的にかなり参っている。

彼の肩越しに、明日香たちに銃口を向けるテロリストが見えた。

明日香の銃が火を噴くのと、国務長官の身体が二人の前に立つのが、ほとんど同時だった。

国務長官の身体がのけぞるように跳ねると、床に倒れた。

明日香は膝をついているテロリストにもう一発銃弾を撃ち込み、死んだことを確認すると、国務長官の状態を調べた。

横でスーザンが国務長官の手を握っている。

呼吸のたびに鮮血が口から溢れる。肺からの出血だ。撃たれたのは肺か。

「ライアンは——」

「しゃべらない方がいいです」

明日香の言葉が無視するように身体を起こそうとする。

「ライアンは——官邸を爆破する。爆発で混乱している隙に——彼

らは官邸を脱出——」

「聞いています。私は爆薬を探しています」

「混乱は——大きければ大きいほどいい。爆薬は——かなりの量——」

国務長官が切れ切れの声を絞り出した。咳と共に大量の血が口を伝う。

「場所が分かりません。爆弾を仕掛けた場所です」

「マギーという女——彼女が——」

いつもライアンのそばにいる女だ。マギーと呼ばれていた。スーザンが大統領と話したときもいた。

国務長官が苦しそうに顔をゆがめる。

「マギーがどうしたのです」

「爆薬を仕掛けた——」

「場所は分かりますか。彼らが自由に動けたのは三階より下です。人質の大部分は三階の大ホールです。人質の一部は二階のエントランスホールにもいます。より大きな混乱を引き起こすには、三階と二階のどこかです」

明日香は確信を込めて言った。しかし、範囲は広い。二つの階のどこなのだ。人の出入りが少なく、目立たないところに違いない。そして最大の効果が得られるところ。

「二階と三階、両方だ」

立ち上がろうとした明日香の腕を国務長官がつかんだ。

「今からでは、もう遅い。爆薬は——複数仕掛けられている」

「ここで爆発が起これば多数の人質が犠牲になる。私が阻止します」
「爆発は——無線で操作する。半径五十メートル以内——彼らが話していた」

「まだ爆発していないということは、ライアンたちはその範囲にいるということですね」

「ライアンたちが先に脱出して——マギーが爆破する。彼女が——起爆の発信器を持っている」

国務長官が激しく咳き込んだ。胸が血に染まっている。

「私は——アメリカ合衆国——国務長官の身でありながら、大統領を——多くの犠牲者が出た——」

国務長官の言葉が途切れた。

「マギーを捕えて発信器を破壊する」

明日香は自分自身を鼓舞^{こぶ}するように声を出すと、銃をつかむと大ホールに向かった。スーザンが後に続く。

ドアの見えるところに来た時、明日香のスマホが震え始めた。

〈高見沢とは合流したか。四階を出ると報告があつたが、それ以後報告が途絶えている〉

「二階にいと連絡がありました、合流はまだです」
〈爆薬は見つけたか〉

横田の声は緊張に満ちていた。

「これからです。アンダーソン国務長官が死亡しました」

〈何が起こった〉

「詳しいことは後で話します」

〈テロリストの都内でのアジトを探している。ローラー作戦をやっているが、時間がない。五十人程度の外国人が、怪しまれずに一日か二日隠れることのできる場所だ。都内に仕掛けられた爆発物についての新しい情報はないか〉

横田の声はかなり焦っている。都内でいくつかの爆弾が短時間のうちに爆発したら、大混乱が起こるだろう。

官邸と都内の同時爆破。ライアンなら躊躇なくやるだろう。人命など何とも思っていない男だ。何としても防がなくては。明日香は必死で考えた。

「私が送った、テロリストのスマホのデータ解析を急いでください。都内の爆弾についての情報があるはずです」

〈関係部署に伝える。他に新しい情報が手に入れば、知らせてくれ〉
横田の電話は切れた。

ホワイトハウスのウエスト・ウイング一角の小会議室。

室内の空気は異様な緊張で張り詰めていた。十分ほど前に日本政府の官僚の一人から、「プリンセス、安全確認」の報が入ったのだ。ドナルド大統領は、直ちにマッシュユへの攻撃作戦開始の命令を出した。

前面には百インチモニターが三台置かれている。

粒子は多少荒いが、個人の動きははっきり分かった。一つは赤外線映像で白い影が人間だ。

部屋には大統領を囲むように首席補佐官、国防長官、FBI、CIA各長官、NCTCセンター長、統合参謀本部議長以下、三人の閣僚と軍関係者がいた。

モニター画面には、はるか宇宙から見るマッシュ社のリアルタイム映像が映し出されている。

広大な土地に砂漠地帯、山岳地帯、そして都市を模した地区の三つの区分が眼下に広がる。

「これから突入します。右の画面がFBIテロ緊急展開班が装着しているカメラです」

FBI長官が説明した。

右端の画面の水平視野の動きが激しくなった。左画面には現場指揮室が映っている。

「攻撃ヘリ二機、隊員輸送ヘリ三機による奇襲攻撃です。まず、戦車と装甲車を攻撃ヘリで叩きます。その後、輸送ヘリが着陸してFBIの隊員三十五名が本部施設を攻撃し、無力化します。同時にFBIの地上班が地元警察の援助を得て、マッシュ幹部の逮捕に向かうというシナリオです」

「マッシュには百名以上の戦闘訓練を受けた兵士が常駐していると聞いている。軍の援助は必要ないのか」

「反撃してくるのは三分の一以下と推定しています。他の者は何が

起こっているかすら知らないでしょう。それに、後方には二百名の州兵が待機しています。応援態勢が取られていて、要請があり次第出動できます」

大統領は目の前のモニター画面に神経を集中させた。FBIの急襲部隊のヘルメットにつけたカメラが映したものだ。

前方に戦車と装甲車が見える。周りを歩いているのは、迷彩服にヘルメットを被り、自動小銃で武装した兵士だ。

音の消えた世界が続く。その中を映像が移動していく。

「国内にこんな施設があるとはな。軍の設備と同じだ」

「ジャングル、砂漠、都市、あらゆる地形に対応できる傭兵の訓練施設です。彼らはいずれ軍の手足となって、中東など世界の紛争地帯に派遣されます」

「軍隊対軍隊か。これじゃ、内戦じゃないか」

閣僚の一人から声が聞こえる。

「ここで訓練された兵士が、テロリストとして日本に送られ、現在首相官邸を占拠していると言うのか」

大統領の口から吐きが漏れた。

話しながらも大統領の目はモニター画面に貼り付いている。

数十の白い影のようなFBI緊急展開班の隊員が銃を構えて進んでいく。衛星からの赤外線映像だ。かすかに聞こえ始めたのはヘリのローター音か。

一発の銃声が響いた。それを合図に、銃声が上がりはじめ。

「攻撃が始まりました。テロリストが反撃しています。しかし、制圧は時間の問題です」

FBI長官が大統領に説明する。

警視庁対策本部のドアが開くと、梶元の秘書が飛び込んできた。

「アメリカで、テロリスト本部の攻撃が始まりました。官邸のテロリストたちにも、すぐに報告が入るでしょう。新崎総理と人質たちが心配です」

「SATと自衛隊を官邸に送り込んでください。できるだけ気付かれないように。ただし、攻撃は現場の指示を待ってください」

梶元は肩を落として言った。大統領の攻撃の根拠は何だ。娘の安全が確認されたのか。

4

遠くから爆発音が聞こえてくる。東京湾のほうだが、かなり大きな爆発だ。

明日香はスマホを握りなおしてタップした。横田の音がすぐに返ってくる。

「爆発音が聞こえました。爆弾の撤去に失敗したのですか」

「おまえの言ったように、テロリストのスマホに、都内に仕掛けられた爆弾の情報があった。発見した爆弾をお台場の公園で爆発させ

た。解除するよりその方が早いし安全だ。テロリストも爆発音を聞くと安心するんじゃないか。我々が爆発させたとは思わないだろう。官邸はどうなってる」

「テロリストは都内のパニックにまぎれて自分たちが脱出してから、官邸を爆破するつもりです。それまでに起爆の発信装置を発見します」

「十分以内にあと二個の爆弾を爆破する。把握している爆弾は全部で十六個。三つは解除して、一つは爆発させた。残りは捜査中だ。

我々が都心に仕掛けられた爆弾について知っていることに、テロリストは気付いているか」

「分かりません。しかし、彼らに動揺は見られません。淡々と行動しているという感じですよ」

〈人質は無事か〉

「今のところは。都心の爆弾のタイマーはどうなっていましたか」

〈バラバラだ。同時に爆発させるよりは混乱が激しくなる。いつ爆発するか分からない恐怖がパニックを生む。警視総監がS A Tの突入を急^せかしている」

「今突入されると、人質に多くの犠牲者が出ます」

〈私もそう思う。しかし、いつまでのばせるか〉

「時間がなさそうです。私は官邸内の発信装置を探します」

明日香はスマホを切った。

明日香は右手に短機関銃を構え、スーザンの肩を抱くように支えて走った。

辺りはますます騒がしくなっている。テロリストの威嚇いかくによる銃声の間をおかず響いた。人質たちが一塊になって怯えた視線を周囲に向けている。これから、何が始まるのだ。

どこに行けばいい。明日香は自身に問いかけたが、目の危機に対処するのに精いっぱいだ。無意識のうちに二階のエレベーターに向かっていた。

階段の陰に男が倒れている。明日香は男の側に駆け寄った。男が明日香に気づき、立ち上がろうとする。

明日香は駆け寄って、身体を支えた。

「高見沢警部、動かない方がいい」

顔が青白く、身体を起こしているのがやっつのようなのだ。

スーザンが傷口を調べた。

シャツが赤く濡れている。胸と腹の傷口が開いているのだ。

「洗面所の横に小部屋がある。そこに隠れて、外と連絡を取るんだ」

高見沢の切れ切れのかすれた声が聞こえた。

明日香はスーザンとともに、高見沢の身体を支えて歩き始めた。

部屋にはデスクと椅子が雑然と置かれている。

「ドアを半分開けておけ。外から我々が見えないようにしろ」

明日香はデスクを移動させてその背後に高見沢を横たえた。外か

ら中は見えても、人は見えないはずだ。

廊下を行きかうテロリストの足音が激しさを増している。いよいよ脱出が始まったのか。

「プリンセスが逃げた。近くにいるはずだ。必ず捕まえるんだ」

ライアンの声と共に廊下の足音が激しくなった。ドアの開閉の音があちこちで聞こえ始めた。銃撃の音が聞こえ、近づいてくる。威嚇のために撃っているのか。

「あなたは高見沢警部を見てて」

明日香はスーザンに言うのと短機関銃を構えた。

半分開けたドアからテロリストの顔が覗いた。短機関銃の銃口がデスクに向けられる。

明日香はテロリストに向かって引き金を引いた。男が跳ね上がるように倒れる。

「こつちだ。女がいたぞ」

廊下で大声がして、足音が集まってくる。

部屋に向けて銃撃が始まった。

明日香は短機関銃の引き金を引き続けた。

数人のテロリストが倒れているが見えたが、銃撃は激しさを増すばかりだ。仲間を呼ぶ声も聞こえる。

「マガジンはあと一つ。でもこれで十分。私がテロリストを全員、やっつける」

自分に言い聞かせるように呟いて背後を見た。スーザンが高見沢

の身体を支えて壁にもたれさせている。

「出てくるんだ、女警護官。命だけは助けてやる」

ライアンが叫んでいる。その声に向かって短機関銃を撃った。

「二人は隠れてるのよ。私が何とかする」

明日香は短機関銃の弾倉を調べた。ほとんど残っていない。

「一分待ってやる。出てこなければ手榴弾を投げ込む」

ライアンが怒鳴った。

「あなたたちはここにいるのよ。外からは見えない。彼らは私一人だと思ってる。私がテロリストを他に誘導する」

「ダメよ。出ると殺される」

「これを持ってて。位置発信機がついてて、位置がわかる。私の上司が探し出して救出してくれる」

明日香はスマホをスーザンに渡した。

「あと十秒だ。俺は時間厳守だ」

「高見沢さんが呼んでる」

スーザンが明日香の横に来て言う。

「私が見張ってる」

スーザンが明日香から短機関銃を取った。

高見沢の側に行くと、目を閉じて呼吸も荒い。かなり苦しそうだ。

「私だったら、殺されない。大統領の娘だからね。二人は隠れてるのよ」

声に振り向くと、スーザンが両手で持った銃を高く上げて部屋を

出ていく。明日香が止める間もなかった。

「私は大統領の娘。撃たないで」

銃撃で半分砕け散ったドアから、スーザンが銃を床に投げるのが見えた。

飛び出そうとした明日香の腕を高見沢がつかむ。行くな、その目が言っている。

頭に銃を突きつけられたスーザンが、ライアンの前に立たされている。

「女警護官はどこに行った」

「私を知るわけないでしょ。今ごろ脱出して、応援部隊を連れてくるんじゃないの」

「おまえが喋らないと、また人質が死ぬことになる」

「ここにはすぐに日本とアメリカの特殊部隊が来る。彼女と一緒にスーザンとライアンの言い合う声が聞こえた。

低い悲鳴を上げてスーザンが床に倒れた。ライアンが殴りつけたのだ。

「行くぞ。女総理を連れてこい」

ライアンの声で足音が部屋の前を通り、遠ざかっていく。

そのとき、部屋の中に何か投げ込まれた。やめて——スーザンの悲鳴のような声上がる。

「手榴弾だ」

高見沢が叫ぶと、明日香の襟首えりくびをつかみ、強く手前に引いて覆い

かぶさる。

爆発音が轟き、爆風が二人を襲った。

辺りに轟音と共に粉塵が立ち込めた。ドアから銃口が覗くと銃撃音が響き、高見沢の身体が跳ねた。足音が遠ざかっていく。

明日香は高見沢の身体を持ち上げ、瓦礫をかき分けて身体を起こした。

高見沢の服の背はズタズタに破れ、血の中に赤い肉が見えている。頭に木片が刺さり、大量の血が流れていた。

「高見沢警部、しっかりしてください」

声をかけたが反応はない。首筋に指をあてても脈は感じられない。

明日香は高見沢を床に寝かせると、拳銃を取り、部屋を出た。倒れているテロリストから短機関銃と拳銃を取って、弾が残っているのを確かめた。まだ爆発が起こっていないということは、ライオンたちは遠くには行っていない。スーザンが気になったが、官邸の爆破を阻止することが先だ。

起爆の発信機はマギーが持っている。ライオンの合図で爆発させるのだ。その前に必ず阻止する。

大ホールに向かった。何人かのテロリストが倒れているが、まだ半数以上が残っているはずだ。

大ホールにマギーの姿が見えた。数人のテロリストと人質たちを見張っている。

明日香はスカーフを鼻まで上げて、仲間のふりをして近づいていた。何人かのテロリストとすれ違ったが、気づく様子はない。

明日香は倒れているテロリストからスマホを取って、横田を呼び出した。

「人質を閉じ込めている大ホールの前に、三人のテロリストがいます。一人はマギーです。彼らも脱出の用意をしています」

〈脱出前に人質を殺害するということはないのか。人質はテロリストの顔を見ている〉

「爆発時に人質を生かしておくほうが混乱が大きくなります」

〈警視総監が突入を急ぐよう急かしている。時間がたつほど、人質の犠牲者が増えると言う〉

「無責任すぎます。官邸の爆破は私が防ぎます」

〈私は正門前の機動隊の指揮車にいる。SATと自衛隊の特殊部隊が、攻撃態勢を整えて待機している。おまえの指示があり次第、官邸に突入を開始する〉

横田の緊迫した声が返ってくる。

明日香の人質救出の連絡が入り次第、突入する。横田が部下に指示を与える声が聞こえた。

明日香はスマホを切ってポケットに入れた。

壁際から覗くと、テロリストが大ホールのドアを閉めているのが見える。

「人質を大ホールに閉じ込めるつもり。爆薬はホールの中にもある。爆発が起これば全員が死亡する。何やってるのよ、あいつら」

明日香は呟いた。テロリストが運んできた五缶のポリタンクを蹴り倒している。ガソリンの臭いが広がってくる。

ポリタンクを置いて戻ってきたテロリストの一人が、明日香に視線を向けた。声を出す前に明日香が銃で殴り倒す。

ライアンが安全圏に脱出して、マギーに起爆の合図を送る前に発信機を破壊しなければ。

明日香はテロリストを狙って引き金を引いた。短機関銃を乱射しながら大ホールに向かって走った。

テロリストが銃を撃ち始め、辺りは大混乱に陥^{おちい}った。怒鳴り声に混じって、悲鳴のような声も聞こえる。人質たちが銃

撃戦に気づいて、騒ぎ始めたのだ。

明日香は短機関銃を構えたまま大ホールに入った。マギーたちの姿が見えない。

「騒がないで、床に伏せて」

叫びながら天井に向けて銃を撃った。騒いでいた人質たちが静まり返る。

「私は総理の警護官です。落ち着いてください。立たないで。ここに座っていてください。すぐに警察が来ます」

大声で叫んだ。

「立っていると流れ弾に当たります。座って、身体を低くして」

人質たちは明日香の言葉に従った。

もう一方のドアが開き、数人のテロリストが入ってくる。中の一人はマギーだ。

「銃を捨てなさい」

明日香の声が響く。

マギーが動きを止めた。自分の胸に向けられた銃口を見つめている。その顔に不敵な笑みが浮かんだ。

明日香の反応を確かめるように、左手に持った銃をゆっくりと上げる。

「動くな。銃を捨てなさい。それ以上続けると、あなたを射殺する」マギーの動きは止まらない。明日香は引き金の指に力を込めた。

爆発音が響いた。明日香は無意識のうちに身体を伏せていた。

人質たちの間からいくつもの悲鳴が上がった。すすり泣く声も聞こえる。うずくまる人質たちの中から、顔から血を流した若い女がフラフラと立ち上がった。

再び爆発音が轟いた。

大ホールの一角が崩れて瓦礫と砂埃すなほこりが舞い上がった。うずくまっていた人質たちが、立ち上がり逃げ場を探して周囲を見ている。

テロリストの一人が、何か叫びながら天井に向けて銃を乱射した。

「みんな、落ち着いて。動くとテロリストの標的になるだけ」

明日香が大声で言う。

人質の一人の若い男がその声を振り切るように、出入り口に向か

って走り出した。

銃声が轟く。男のけ反るように倒れた。倒れた男の背中に向かって、さらなる銃撃が加えられる。男の身体が跳ね上がる。

テロリストが短機関銃を撃ち続けている。二十歳前後の若い男でパニックを起こしているのか、顔が恐怖でゆがんでいる。

「やめなさい」

明日香の声にやっと我に返ったように、銃撃をやめた。

明日香はその若いテロリストを銃で殴りつけた。

マギーの姿を探したが消えている。銃を撃つ振りをして、発信器を押し込んだ。しかしまだ、本格的な爆破ではない。アンダーソン国務大臣は、官邸をすべて破壊するほどの爆薬が仕掛けられていると言った。

「まだ官邸は爆破されていない。私たちは生きてる」

明日香は口の中で呟いた。

「落ち着いて。仕掛けた爆弾のほんの一部が爆発しただけ。残りはまだ起爆されていない。私は必ず官邸爆破を阻止する」

人質の数人が出口に向かって走り出す。

出口に数名のテロリストが立っている。一人はマギーだ。

「ダメ。ガソリンがまかれている」

明日香が叫んだが、聞いている者はいない。

明日香は立ち止まって銃を上げ、マギーに狙いを付けた。その腕を下した。人質たちでマギーが隠れた。

炎が上がった。マギーがガソリンに火をつけたのだ。炎は一瞬にして出口に向かった人質たちを呑み込んでいく。

「引き返して。すぐにスプリンクラーが作動する」

明日香は悲鳴を上げている女性の腕をつかんで落ち着かせようとした。言葉通り、天井から水が降り注いでくる。

マギーが両腕を高く上げる。右手には短機関銃、左手には発信器が握られている。顔には不気味な笑みが浮かんでいた。

「やめろ」

声が響き、男が飛び出してくる。アレンだ。皆の視線がアレンに集中する。

マギーがアレンに向けた銃が火を噴く。アレンが音を立てて、マギーの足元の床に倒れた。

「これ以上の虐殺は僕がさせない」

かすれた声が漏れる。マギーの表情が変わった。

「伏せて」

明日香は横の女性の腕をつかんで、床に倒れ込んだ。

アレンの手には手榴弾が握られている。轟音が轟く。

明日香が立ち上がると、アレンとマギーが重なるように倒れているのが見えた。アレンの上に横たわるマギーの身体から白煙が上がると、右腕が消えていた。

「人質解放。直ちに攻撃部隊を投入してください」

明日香はスマホを出して叫ぶように呼びかけた。

庭で銃撃が始まった。官邸前で待機していたS A Tと自衛隊の攻撃部隊が官邸敷地内に突入したのだ。

三階の入口付近から銃撃の音が聞こえ始めた。S A Tと自衛隊が建物内でテロリストと交戦しているのか。まだ、かなりの数のテロリストが残っているのだ。

明日香は銃弾のなくなった短機関銃を捨て、拳銃を構えて中ホールを出た。

数人のS A Tの隊員が銃を構えて階段を下りてくる。

明日香はスカーフを取り、拳銃を捨てると両手を高く上げて膝をついた。

「撃つな。夏目警護官だ」

横田の声が響き、明日香のところに駆け寄ってくる。

「人質たちは」

「大ホールです。新崎総理とスーザンは人質としてライアンに連れて行かれました」

「アンダーソン 国務長官は」

「死亡しました。詳しいことは後で話します」

「高見沢はどこだ」

「殉職しました。私の命を護って——」

横田の顔色が変わる。明日香はさらに続けた。

「リーダーのライオンたちは新崎総理とスーザンを連れて公邸のト

ンネルに向かいました。国会に出て、都内に逃亡するつもりです」

「トンネルの国会入口には警備の者を置いている」

「何名ですか」

「五名だ」

「少なすぎる。ライアンは国会にも都内の仲間を送っているはずで
す」

横田が国会のトンネル前の警護部隊に連絡したが、誰も出ない。

「様子を見に行け。国会内には他の部隊もいる」

無線に向かって怒鳴った。

「全員が撃たれて死亡。繰り返します。全員が……」

横田の無線機から聞こえてくる。

明日香は、必死でライアンたちの行方を考えた。

「六本木アークタワーにテロリストたちのアジトがあった。現在は
警視庁と自衛隊で制圧している」

「おそらく、ライアンは制圧されたことをすでに知っています。他
の場所に向かっています。スーザンが私のスマホを持っています。

追跡装置で位置を調べて連絡をください」

明日香は横に立っていた隊員から無線機を取って、テロリストの
拳銃を拾うと駆け出していた。

「待て、夏目。これを着ていけ。それじゃ味方に誤射される」

横田は自分が着ていた上着と防弾ベストを、明日香に向かって投
げた。

明日香は走りながら、防弾ベストを身に着け、上着を着た。

5

官邸建物を出ると中庭はS A Tと警察官、自衛隊員で溢れていた。

「夏日警護官ですか」

官邸の門を出たところで、S A Tの制服隊員に声をかけられた。領くと、付いてくるように言う。

「横田課長から連絡がありました。車を用意しています」

指さすほうを見ると、バンが止まっている。運転席にS A Tの隊員が座っていた。後部座席に完全装備の隊員が五人乗っている。

明日香が助手席に乗り込むのと同時に、一人の隊員が明日香の後ろの座席に飛び込んできた。それを合図のようにバンが急発進する。

「スマホの信号を拾っています」

背後から隊員の差し出すタブレットには輝点きてんが動いている。

「目標は外堀そとほり通りを南下、東京湾、豊洲方面とよすに向かっていきます」

外堀通りはガランとしていた。車は一台も走っておらず、人影も見えない。既に避難しているのだ。だが、ビルのいくつかの窓にはまだ明かりがついている。人が残っているのか、消し忘れたのか。

官邸の西の方で爆発音が響いた。振り向くと夜空にオレンジ色の炎が噴き上がっている。

「発見されなかった爆発物の爆発です」

運転している隊員が言う。

続けて二ヶ所で爆発音が響いた。炎と白煙が上がるのが見える。

「くそっ」

背後の隊員の舌打ちが聞こえる。

「仕掛けられている爆弾は全部で十六個。十二個は発見しましたが、四個は発見できていません。それらでしょう。しかし、住人の避難はできています」

隊員の言うとおり、混乱は起きそうにない。現在、都心は無人の町なのだ。

混乱にまぎれて脱出するという、ライアンの計画は失敗した。

車は丸の内を通りすぎて走っていた。道路の両側には高層ビルが並んでいる。

「止めて」

タブレットを見ていた明日香の声で、車は止まった。

「近くよ。おそらくあのビルの中。ここからは歩いていく」

前方のインテリジェントビルに視線を向けている。

明日香と隊員たちはバンを降りた。東京リバイタータワーだ。アメリカ資本によって建てられた四十五階建てのビルで、壁面にガラスを多用したモダンな造りで話題になった。入っている企業の八十パーセント以上が外資系だ。

明日香を先頭に縦一列に並び、歩いてビルに近づいていく。遠く

で四回目の爆発音が聞こえた。

「これで把握している爆弾の全部です」

「静かに——」

かすかにヘリのローター音が聞こえ、近づいてくる。

「現在、都心上空の飛行は禁止しています。警察、自衛隊のヘリも飛んでいません」

明日香は空を見上げた。隊員たちもビルの間の黒い空間を見ている。しかしヘリの機影は見えない。

東京リバイタータワーの中に、いくつかの明かりが見えた。懐中電灯の明かりだ。その明かりが、外壁に沿って作られた展望エレベーターと共に上がっていく。

「テロリストは東京リバイタータワーです。ビルのデータを送ってください」

〈データを送る手配をした。ビルに入っているのは大部分が外資系企業だ〉

明日香が無線機に呼びかけると、すぐに横田の声が聞こえる。彼らもスーザンが持っている明日香のスマホの位置を追っているのだ。

「ヘリポートはありますか。ヘリの音がしています。少なくとも二機」

「一機分はある。だがUH型の輸送ヘリなら、屋上に二機は十分に離発着できる」

「確かめます。人質は新崎総理にスーザン。救い出してから攻撃し

ます」

〈付近にそれ以上の高層ビルはない。三百メートルほど南にあるが、そこにスナイパーを配置する〉

「こちらの合図を待ってください。ライアンは人質の殺害をためらいません。二人の安全を第一にします」

〈救出できそうか〉

「救出します」

明日香は強い決意をこめて言うと、無線を切った。

「ついてきて。テロリストは約十名。人質は女性二名。一人は新崎総理。もう一人は——ワシントン・ポストの女性記者」

明日香とS A Tの隊員はビルに入り、エレベーターに乗った。身体は疲れ果て、弾がかすった痕は痛んだ。動きもいつも通りとはいかなかった。だが、気力だけは十分にある。高見沢の分までやらなければならぬ。二人は必ず無傷で救出する。

最上階にたどり着いた。ここから屋上に続く階段がある。五基の内、二基のエレベーターがその階に止まっている。

「彼らはすでに屋上に出ている。全員注意して」

明日香は短機関銃の弾倉を調べ直して構えた。

屋上に出ると、テロリストたちが上空を見上げている。その中ほどに新崎総理とスーザンの姿が見えた。

黒い空からヘリが二機近づいてくる。

「彼らは最初に人質をヘリに乗せる。ヘリに乗せられると、私たち

は手が出せない。その前に阻止する」

言っではみたが、どうすればいいか分からない。人質は無傷で救出しなければならぬ。高見沢ならどうする。考えたがやはり答えはない。

「スマホを貸して。持つてるでしょ」

背後の隊員が差し出すスマホに、自分のスマホの番号を打ち込む。

スーザンが顔を上げ周囲を見ている。スマホの振動に気付き、明日香を探しているのだ。スーザンの視線が明日香に向けられ止まった。

「私の合図で飛び出すのよ」

明日香は隊員たちに言いながら、スーザンに向かって親指を下に下げた。

スーザンが新崎総理の肩を抱くようにしてしゃがんだ。

明日香は短機関銃を撃ちながら飛び出した。その後S A Tの隊員たちが続く。

一度の連射で、テロリストの三分の一が倒れた。

へりの高度が下がり、中から銃撃が始まった。

「散開して応戦。総理とスーザンに気を付けて」

明日香は銃を撃ちながら、給水タンクの背後に走り込んだ。S A Tの隊員たちは様々の場所で応戦している。

S A Tの銃撃に押されるように、へりの高度が上がり始める。

スーザンが新崎の手を引いて走り始めた。

二人の後をテロリストの一人が追っていく。明日香は銃弾を撃ち尽くした短機関銃を捨て、拳銃を構えた。連射すると、三発目でテロリストが倒れた。

スーザンに遅れていた新崎がしゃがみ込んだ。弾が当たったのか。スーザンが駆け寄って助け起こしている。

ライアンがヘリに向かって走りながら、明日香たちに短機関銃を撃ち続けている。

一度高度を上げたヘリが再び、高度を下げてくる。

「ヘリはいい。先に総理とスーザンを保護する」

明日香は叫びながら、二人の方に近づいていく。

隊員たちも二人を追うテロリストたちに向けて、銃を撃ち続けている。

二機のヘリの内、一機がバランスを崩した。テールローターから黒い煙が出ている。機体が傾き、ローターが携帯電話のアンテナ塔に触れた。激しい火花を散らして墜落していく。屋上のコンクリートに当たったローターが砕け、破片が明日香たちに向かって飛んでくる。明日香は反射的に倒れ込んだ。

一本のローターが数メートル先を、不気味な音と火花を散らして跳ねていった。

もう一機のヘリが屋上すれすれに高度を下げてきた。

ライアンが機体に向かって飛びつくように上半身を投げかけると、複数の手が伸びて引き上げられた。続けて数名のテロリストが乗り

込むと、ヘリは急速に高度を上げていく。

隊員がヘリに向かって銃を撃ちまくっているが、底部の鋼板は厚く、火花が飛ぶだけだ。

「ヘリは放っておいて。クイーンとプリンセスを救出する。残りのテロリストを制圧して」

明日香は隊員に叫ぶと、二人のもとに走った。

墜落ヘリの陰に隠れていたテロリストが銃を撃ちながら飛び出したきたが、S A Tの銃撃を浴びて倒れ込んだ。明日香は携帯用アンテナ塔の下にうずくまっている総理とスーザンのもとに走った。

「大丈夫ですか、総理。ケガはありませんか」

総理が明日香に向かって何度も頷いている。

「来てくれると信じてた」

スーザンが明日香の腕をつかむ。

「救出終了。クイーンもプリンセスも無事です。至急、救急車を呼んでください。テロリストはヘリで逃走中。あとは宜しくお願いします。

「私たちは——」

明日香は無線機を出して横田に呼びかける。

その言葉が終わらないうちに、三百メートルほど先のビルの屋上から閃光が走った。ミサイルだ。

ヘリが燃え上がり、火の玉になって落ちていく。

「屋上のテロリストを掃討する」

明日香の言葉で、S A Tの銃撃が屋上にとどまっているテロリス

トに集中した。

五分ほどで音が消えた。

「ご無事で何よりです、新崎総理」

明日香は携帯用アンテナ塔の横で、スーザンと寄り添うように座り込んでいる総理に向かって改めて言った。

総理はスーザンの腕にすがるようにして立ち上がった。

「ありがとうございます、夏目警護官」

よろめきながらも姿勢を正して言う。

「私の心は無事とは言えない。多くの犠牲者を出してしまった。心はズタズタ。でも、満身創痍まんしんそういとは言いながら、総理としての使命に燃えている。あなたたちを見てみると、悲しんでばかりではいられない。感謝しています」

総理が明日香に向かって頭を下げた。

二人のやり取りをスーザンが見ている。

気がつくと辺りが明るくなっている。ビルの中からオレンジ色の光が見え始めた。ヘリの残骸の陰で何かが動いた。

明日香は反射的に新崎総理の前に飛び出していた。連続した銃声が轟く。

スーザンの悲鳴に似た声上がる。

明日香は総理にぶつかりながら倒れた。

胸に焼けるような衝撃を感じる。

一人のテロリストが拳銃を構えて立ち上がり、明日香たちの方を

見ている。S A Tの銃撃が男に集中した。

「死んじゃダメよ」

スーザンと新崎の、英語と日本語の音が聞こえる。

痛みは感じない。しかし、徐々に意識が薄れていく。

エピソード

事件から半月がすぎていた。

官邸には足場が組まれ、建物全体がブルーシートに覆われて中を見ることはできない。

修理には半年以上かかると言われている。

新崎総理は、官邸敷地内の旧公邸を臨時の官邸として移っていた。

スーザンは三日間入院して体力が戻ると、同じ病院に入院している明日香のもとに通っていた。

「銃弾は二発。防弾ベストの胸で止まった。ホント、あなたはラッキー・ウーマン」

「横田課長が貸してくれた。命の恩人というところね」

肋骨が二本折れ、打ち身と切り傷は身体中にあった。顔の切り傷は幸運なことに残らないようだ。銃弾が肉をえぐった傷は二の腕と右脇腹の二ヶ所。これは跡が残ると言われている。「ビキニで歩けば

みんな振り向くよ。姉ちゃん、嬉しいだろ」と純次が笑ったが、見舞いの花を投げつけ、病室を追い出した。スーザンと遠山が呆れた顔で見っていた。官邸にいた三日間で体重は五キロ近く減っていた。

「明日、帰るんですよ。エア・フォース・ワンは迎えに来ないの」
明日香はスーザンに聞いた。

「断った。あの人が迎えに来ると言っただけど、私用で大統領専用機を使ったりしたら、後で必ず問題になると忠告した」

「だからね、テレビで有能なアドバイザーが見つかったと言っただのは。大統領の言動が若干普通じやっかんに近づいたって。ホワイトハウス入りはいつなの」

「あり得ない。要請はあったけど、これからも大統領批判を書き続けると言っただけ」

「そうしたら——」

「事前に見せてくれて、考慮するから」

「なかなか純情じゃないの。見かけによらず、あの大統領」

スーザンは答えないが、まんざらではなさそうだった。

しかし、今回の事件に対しては、今後は様々な訴訟が起きそうだった。シェールオイル・ガスもその一つだ。

受けて立ってやる——大統領の言葉だ。自信に満ちているが、今回はどうなるか分からない。

テロリストの要求の一部はマスコミに流れたが、一部は極秘のままになっている。

（我々アメリカ合衆国は同盟国日本と協力して、日本の首相官邸占拠という二国にまたがったテロ行為を打ち砕き、勝利した。多くの犠牲者を出し、不幸な出来事だったが我々はそれを乗り越え、日米同盟はますます強固なものとなった。この教訓は今後も生かしていかなければならない）

辞任の決意などおくびにも出さず、相変わらずの勢いとノリで喋りまくっていた。しかし、以前にはなかった、時折り考え込む様子を、大統領の側近たちは感じていた。

シェールオイル・ガス開発は一時中止が正式に決まった。その翌日、新たな規制が設けられ、それに従って進められる。

今までの水質汚染による被害者には、企業によって手厚い保障が発表された。その後、責任者には責任追及の裁判が待っている。

新崎総理は、十万人規模の難民受け入れの約束を守ることを国際社会に対して発表した。全ての国と多くの団体、個人が、国際社会の一員としての新しい日本の英断であると高く評価している。

明日香は二ヶ月間の入院が必要と診断されていた。しかし回復は著しく、退院は早まる予定だ。

新崎総理も激務の間をぬって、何度か見舞いに訪れている。

「アメリカ軍なら、シルバースター勲章ものね。日本じゃ、何をくれるの」

スーザンがベッドに身体を起こした明日香に聞く。

「私は公務員よ。自分のつとめを果たしただけ。みんなの力を借り

てね。あなたの力も、スーザン。自分たちが総理の命を護り、国を護った。人質の命を護るために全力を尽くした。最高に栄誉なこと」しかし、護れなかった命も多かった。明日香は声に出さずに呟いた。

「信じられない。自己満足だけだなんて。よくやっつけられるわね。でも、怖い世の中になったもの。何とかならないのかしらね」

スーザンがしみじみとした口調で言う。それは明日香も同じだ。

明日香は窓に視線を向けた。

ビルの間に青い空が見える。おまえはよくやった——高見沢の声が響いている。これが私の勲章だ、明日香は強く思った。

〈終了〉